

# 戦中の美唄の寸景

廣岡 文太郎

## 1 美唄で模造戦闘機と出会う

昭和 20 (1945) 年の夏休みに入る少し前、国民学校初等科 3 年生の私は、遊び仲間と連れ立って、放課後ちょっと寄り道して帰ろうと、元の川西製材所 (今の農協裏) 方向へ探検に行きました。すると白木の高い板塀<sup>いたべい</sup>で工場全体を囲んでいるのではないか、これはどうあっても中をのぞく価値ありと、大きな開き扉と地面との隙間<sup>すきま</sup>に頭をくっつけて、中をのぞいて驚きました。何と、敵を欺くための板張りの戦闘機が、こちらをにらむ様にして何機も立っているのではないか。私はその瞬間、生意気にも、これでは日本は戦争に負ける、と心ひそかに思ったものです。

## 2 敗戦を喜ぶ

夏休みに入ってからすぐ、「8 月 15 日の昼 12 時に学校へ出て来るように」との連絡を受けました。キラキラと熱い太陽の照りつける中、昭和天皇陛下の玉音放送<sup>ぎょくおん</sup>が流れていました。もちろん、何をおっしゃっているのか皆目<sup>かいもく</sup>理解できない。しかも何の説明もない。誠に不思議な光景でした。

「解散」となった時、担任の先生が「わしの後について、こっちへ来い」と言って、校庭の隅に集められました。先生が妙に緊張しながらおっしゃるには、「今の天皇様のお言葉は、日本がこのたびの戦争に負けた、と言っておられる。お前たち、決してそれを信じるな。それは嘘だ。日本は絶対負けないのだ」とのことでした。私はその言葉を聞いたとたん、やっぱり日本は負けたんだ、しかし良かった、良かった、と不思議なぐらい思ったものでした。

## 3 戦後を迎えた美唄駅でのある出来事

その日、昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日を境に、日本人の価値観が大きく転換して、あらゆる場面での混乱が始まりました。その最たるものとして、外国人の強制労働者や、捕虜として

拘束されていた人たちが一度に解放され、街はある種、無政府状態になっていました。

また、実際には違ったようですが、戦勝国人になった人の中で、ある国の人々が、美唄の時計店を襲って腕時計を奪ったという噂<sup>うわさ</sup>が、当時はありました。その時計を両腕に何個も並べてはめて、それを自慢げに見せびらかされた時は、不気味な気がしました。そのほか、鶏や卵を求めて、農家が襲われたというような話もありました。そんな中で、特に心を痛めた事件に偶然出会いました。

それは、やはり学校帰りの道々、美唄駅の前を歩いていた時のこと、駅舎の待合室の方から、大人が大きな声で泣き叫ぶ声が聞こえたので、その方へ走って行ってみると、大人たちが待合室を丸く取り囲んで突っ立っており、泣き声はその中から聞こえてきました。恐る恐る、見物人の大人のまたぐらから中をのぞくと、泣き声はその中の一人の日本人で、4、5人の外国人が大きな叫び声を上げながら、殴る蹴る、頭を踏みつけるなど、やり放題の乱暴<sup>ろうぜき</sup>狼藉の真っ最中で、日本人の大人は血まみれの状態で、泣き叫んでいるではありませんか。私は恐怖で震え上がり、囲みの外へ飛び出しておりました。その様子を、囲みの外で遠巻きに見守っていた人が、その訳を小声で語ってくれました。その訳とは、「今乱暴されている人は、以前美唄の炭鉱で外国人を使っていた先山<sup>さきやま</sup>（切羽<sup>きりは</sup>（採掘場）で第一線に立つ熟練の鉱員）で、その外国人をいじめて使ったために恨み<sup>うら</sup>を持たれ、変装して逃げ回っていたが、遂<sup>つい</sup>に見つけられ、今その時の仕返しを受けているのだよ」とのことでした。私は、それはそれで納得させられました。

ところで、私の友達の祖父で、この人も炭鉱で先山だったので、後日その話をしたところ、意外にも、「わしの家にもあいさつに来てくれたが、色々な物を持ってきてくれ、礼まで言ってくれたんだがなあ」とのことでした。もちろん、その人は人間味のある、慈悲深い人でした。お話を聞いた後、やはり、どこの国の人でも、赤い血の流れる人間なのだ、とつくづく思ったものです。

（ひろおか ぶんたろう 昭和 11（1936）年 美唄生まれ）



【参考】高橋時計店（昭和3（1928）年）



【参考】盤の沢の強制連行中国人労働者（昭和20（1945）年）